

宇治茶の歴史と発展

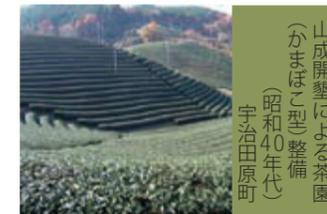
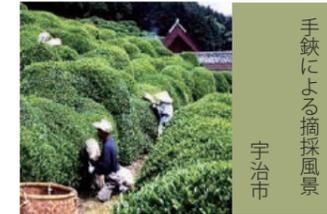
時代	山城の歴史	宇治茶の歴史
平安時代 (794年～1185年)	1053 平等院鳳凰堂建立 1102 白川金色院建立 1107 浄瑠璃寺九体阿弥陀堂建立	815 唐から蒸すなどして不揉製で、煎茶法で飲む茶が伝わる 【お茶を煮出して飲む文化】 山城を含む畿内などに茶を植え、これを献上することを命ず 『日本後紀』【お茶が登場する日本最古の記録】 平安京大内裏茶園の茶を宮廷法会「季御統経」で使用
鎌倉時代 (1185年～1333年)	1222 海住山寺磁心、瓶原大井手を開削すると伝える 1331 元弘の乱、笠置寺を焼失する	宋から蒸製で不揉製、点茶法で飲む茶が伝わる 【お茶をお湯にとかして飲む文化】 梶尾で茶の栽培開始 宇治で茶の栽培開始 闘茶(茶かぶき)が流行 宇治茶を贈答用に使う ('信秋記'【宇治茶の初見史料】)少なくとも鎌倉時代末期までには宇治で茶の栽培が始まっていることが推定できる
南北朝時代 (1334年～1392年)		1374 宇治の茶が梶尾茶とともに天皇や将軍家が愛飲するトップブランド茶となる
室町時代 (1393年～1573年)	1428 正長の土一揆起こる 1481 一休宗純没する 1485 山城国一揆起こる	1476頃 宇治の茶が梶尾茶とともに天皇や将軍家が愛飲するトップブランド茶となる 「無上」「別儀」という初期ブランド茶が誕生 【宇治茶師が宇治郷を中心として広く分布する茶園を経営し、常によりよい商品を開発】 茶の湯の登場 16世紀初 16世紀後半 宇治七名園の成立 覆下茶園の出現(宇治市) 中宇治に、茶の湯で使用される茶をつくる、宇治茶師の屋敷街が形成される
安土桃山時代 (1573年頃～1603年)	1573 織田信長、宇治槇島に足利義昭を降す。室町幕府滅亡 1582 本能寺の変、山崎の合戦	1577 ポルトガル人宣教師・ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』において宇治の覆下茶園の様子を記載 1584 豊臣秀吉 宇治郷に対して「禁制」をだし、その特権を認める 1587 豊臣秀吉 京都北野で大茶会を催す 茶の湯の大成(千利休)
江戸初期 (1603年～1691年)	1639 松花堂昭乗没する 1663 隠元、宇治に万福寺を開く	1632 お茶壺道中が制度化される(約250年間、幕末まで続く) 【宇治茶師は、合組とよばれるブレンドを行うなどの創意工夫を凝らし、京都をはじめとする茶人の好みに合わせた茶をつくる】 1654 明から釜炒りで揉み製、淹茶法で飲む茶が伝わる 【お茶をお湯にひたしてエキスを飲む文化】 1690 ドイツ人医師・ケンペル 『日本誌』に宇治茶のことを記載する
江戸中期 (1692年～1779年)	1712 木津川大洪水	1735 売茶翁 京の東山に通仙亭という茶店を設ける 【文人や知識人に煎茶趣味が流行するきっかけ】 1738 宇治製法(青製煎茶製法)を發明(宇治田原町) 江戸で煎茶 大流行 幕末までに、全国に宇治製法が普及する
江戸後期 (1780年～1867年)		茶園造成が行われるなど煎茶の産地が広がる 1835 玉露を開発(宇治市) 覆下栽培が木津川沿いの河川敷や丘陵にも拡大 1859 横浜・長崎開港(日本茶輸出が始まる) 木津川沿いの上粕に宇治茶の集散地となる問屋街が形成される 1867 神戸開港 【宇治茶、主要輸出商品として外貨獲得に貢献】 【茶問屋が輸出発信基地】
明治時代 (1868年～1912年)	1870 童仙房開拓はじまる 1876 官営鉄道(現JR)京都大阪開通 1898 宇治郡などで動力電力供給開始 1901 木津農学校開校 1911 相良郡に動力電力供給開始	山なり茶園の開墾(煎茶の生産体制の強化) 1896 茶集散地を結ぶ路線開通(京都～宇治～上粕～奈良間) 女子教育の一環に茶道が取り入れられる 輸入から国内販売に転じたことにより、宇治茶が一般家庭に普及する
大正時代 (1912年～1926年)		機械製茶が増加
昭和時代 (1926年～1989年)		1955 手鋏による摘採が始まる 1965 可搬型摘採機による摘採が始まる 山成茶園の開墾、防霜ファンの設置が始まる
平成時代 (1989年～)		1998 乗用型摘採機による摘採が始まる 地形改良による集団茶園の造成

日本特有の抹茶の誕生

蒸し製法による煎茶の誕生

玉露の誕生

茶生産景観の進化変遷



2 資産に含まれる文化財

① 整理票

名称	概要
宇治市域の宇治茶の生産景観 (中宇治・白川) ※一部、文化財保護法による重要文化的景観に選定	<p>○てん茶(抹茶)と玉露生産の歴史の中で欠くことのできない重要な位置を占めるとともに、日本の緑茶生産史上の核となす地域で、その歴史が、茶園及び茶問屋と茶農家の町並みの中に体现されている。</p> <p>○評価基準 (iii) (v) (vi) を示す代表事例。</p> <ul style="list-style-type: none"> 宇治では14世紀前期までに茶の栽培がはじめられており、16世紀後期にはこの地で覆下栽培が開発されて日本固有の抹茶を生むとともに、19世紀には宇治製法との融合により玉露も生み出された。 茶園は宇治川河川敷や中宇治から白川にかけての丘陵地などに営まれており、伝統的な本質及び寒冷紗による覆下茶園の景観が見られる。 中宇治には、江戸時代に抹茶などの高級茶の製造と販売を独占した宇治茶師の屋敷をはじめとする茶問屋の町並みが形成されている。町並みの中には荒茶の製造を行う茶工場を持つ茶農家も残る。
城陽市域の宇治茶の生産景観 (上津屋) 八幡市域の宇治茶の生産景観 (上津屋・野尻・岩田)	<p>○宇治郷に限られていた覆下茶園が19世紀以降に拡大された、宇治茶の展開過程を示す地域で、その歴史が、木津川の造り出す風土の中に体现されている。</p> <p>○評価基準 (iii) (v) (vi) を示す代表事例。</p> <ul style="list-style-type: none"> 木津川河川敷の平坦な地を利用し、伝統的な本質及び寒冷紗による覆下茶園が営まれている。 河川敷に堆積する砂混じりの柔らかい土質を活かして栽培される茶は、松の葉のような濃い緑になり、「浜茶」と呼ばれる。 木津川両岸に茶業集落が形成され、多くのてん茶工場が営まれる中に、木造の揉み茶及びてん茶工場が点在する。
京田辺市域の宇治茶の生産景観 (飯岡)	<p>○丘陵の地形と地質を活かした覆下茶園の拡大過程を示す地域で、木津川沿いの独立丘陵の地形を活かした玉露生産の土地利用と景観をひとまとまりで残している。</p> <p>○評価基準 (iii) (v) (vi) を示す代表事例。</p> <ul style="list-style-type: none"> 木津川左岸の独立丘陵に集落と覆下茶園が立地し、丘陵周辺の低地には水田と畑地が広がっており、河川、平地、丘陵からなる伝統的な玉露生産の土地利用を今に残している。 丘陵頂部には京都府南部の山城地域を代表する古墳群が築かれ、地形を活かした生活の歴史が刻まれている。 集落内には江戸時代以来の手揉みによる茶工場も数多く残る。
宇治田原町域の宇治茶の生産景観 (湯屋谷、奥山田、郷之口)	<p>○「宇治製法(青製煎茶製法)」が生み出され、日本全国に緑茶が広まる起源となった、煎茶生産史上の核をなす地域で、自然条件を活かした生産と流通の土地利用及び景観に刻まれている。</p> <p>○評価基準 (iii) (v) (vi) を示す代表事例。</p> <ul style="list-style-type: none"> 古くからお茶の栽培が始められた地域で、大福谷には谷筋の地形を活かした原形というべき茶園が残る。一帯には大規模な山なり茶園も形成され、寒暖の差の大きい気候を活かした煎茶が生産される。 18世紀には、湯屋谷において永谷宗円によって「宇治製法(青製煎茶製法)」が開発され、色・形・香・味ともに優れた日本固有の煎茶が誕生した。この煎茶は江戸に販路が開かれることで、全国に普及した。同地には永谷宗円の生家が一部を残して継承されている他、茶農家及び茶問屋の集落が立地する。 陸上及び水上交通の結節点である郷之口には茶問屋街が発達し、茶問屋の町家が残る。 煎茶の歴史上欠くことのできない重要性を持つ技術革新と販路拡大がなされた地である。

評価基準

- (iii) 文化的伝統や文明の存在を伝承する証拠で希有な存在：「日本の緑茶という固有の文化的伝統の起源と伝統的生産技術を伝承する証拠」
- (v) ある文化を特徴づける土地利用形態の見本：「日本の緑茶生産を特徴づける土地利用と景観」
- (vi) 人類の歴史上の顕著な普遍的意義を有する出来事や伝統、思想、信仰、芸術との関連：「国民諸階層を対象とした喫茶文化の形成への寄与」

名称	概要
和束町域の宇治茶の生産景観 (原山、釜塚、石寺、撰原、湯船)	<p>○露地茶園と茶農家集落が一体となった土地利用と、江戸時代以来の宇治茶生産地の拡大過程を示す多様な山なり茶園の景観を見せる地域で、露地茶園を主とする宇治茶生産の土地利用と景観を代表し、かつ宇治茶生産の拡大過程を典型的に示している。</p> <p>○評価基準 (iii) (v) (vi) を示す代表事例。</p> <ul style="list-style-type: none"> 東端に位置する湯船や修験の行場であった鷲峰山の麓集落である原山は、古くからの煎茶産地である 湯船や原山には、手揉みの茶工場を含む伝統的な屋敷構えを伝える茶農家の住居が群として残り、特有の集落景観を形成している。 19世紀半ば以降に煎茶が輸出品目となると、町内の茶生産地が拡大し、集落裏側の山腹を山なりに開墾した大規模な露地茶園が形成された。なかでも、原山、釜塚、石寺及び撰原の各地区では、集落と山なり茶園の織りなす大規模かつ良好な景観がみられ、京都府の文化的景観に選定されている。
南山城村域の宇治茶の生産景観 (田山、高尾、童仙房、今山)	<p>○木津川水運を背景に、幕末からの煎茶の輸出を契機として、高い標高を活かした露地茶園を徐々に拡大してきた地域で、明治以降の各段階における宇治茶生産の拡大の歴史が、高い標高に展開する独特の風土の中で展開した土地利用と景観に刻まれている。</p> <p>○評価基準 (iii) (v) (vi) を示す代表事例。</p> <ul style="list-style-type: none"> 村の南半に所在する田山、高尾では、山中に山なりに開墾された茶園が点在し、その多くで畝が縦に通される。縦畝は乗用型摘採機の導入にも適しており、生産の合理化と伝統的な景観とが両立してもいる。高尾では独立して立地する家屋の周囲を茶園と水田が取り巻く独特の土地利用が見られる。 昭和44年の高山ダム建設により、茶栽培に好適な霧の発生地域が広がり、田山と今山に新たに緩勾配の露地茶園が造成された。 童仙房は標高500mの山間の平坦地に明治初期に開墾された集落で、水田と山なり茶園が対をなす素朴な景観が残る。 <ul style="list-style-type: none"> 田山、高尾、童仙房、今山は、京都府の文化的景観に選定されている。
木津川市域の宇治茶の生産景観 (上狛)	<p>○木津川と奈良街道が交差する地に位置する上狛には、水陸両交通の結節点としての地利を活かして茶問屋街が形成されている地域で、煎茶の生産拡大にともなって形成された茶問屋街である。</p> <p>○評価基準 (iii) (v) (vi) を示す代表事例。</p> <ul style="list-style-type: none"> 幕末からの煎茶の輸出拡大にともない、茶問屋街へと発展したもので、街道に沿って幕末から昭和初期にかけて建設された広い間口を有する茶問屋が立ち並び通り景観を見せる。

■ 覆下茶園



伝統的な本簀及び寒冷紗による覆下茶園



河川敷の平坦な地を利用した覆下茶園



丘陵の地形と地質を活かした覆下茶園

■ 露地茶園



谷筋の地形を活かした茶園



急斜面の山が頂まで開墾された山なり茶園



家屋の周囲を取り巻く独特な土地利用の茶園



急勾配の斜面に畝が縦断する茶園

■ てん茶工場



木造のてん茶工場



鉄骨造のてん茶工場

■ 揉茶工場



江戸期の揉茶工場



明治～大正期の揉茶工場



昭和初～中期の揉茶工場



昭和後期の鉄骨造の揉茶工場

② 構成要素ごとの位置図と写真 宇治市域の宇治茶の生産景観

中宇治、白川



⑤ 拝見窓が復原された茶問屋
宇治市の茶業の中心地である宇治橋通りでは、独特の歴史と景観の価値を活かした重要文化的景観の整備と活用が進められています。平成26年3月には、茶問屋の旧焙炉場の修復が竣工し、茶の選別をおこなう拝見窓が復原されました。



⑥ 白川の本質覆下茶園
伝統的な覆下茶園では、竹で枠を組んだ上を葎で覆い、その上に稲藁を厚く載せることで遮光し、新芽に甘みをもたらします。宇治市域では、白川や宇治川河川敷などでこの本質の覆下茶園が営まれています。

概要

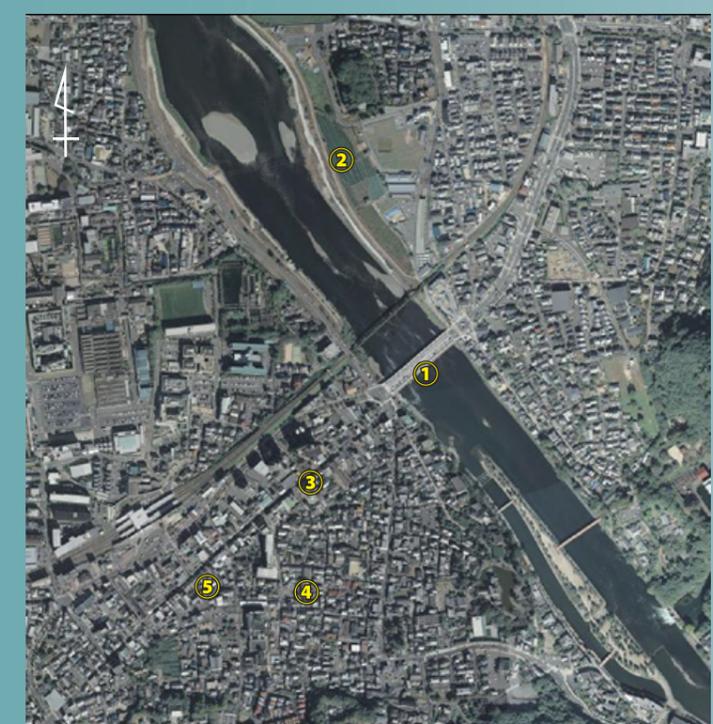
宇治市域は、てん茶（抹茶）及び玉露など、茶畑に覆いをかけて栽培する覆下茶園による茶栽培をおこなう茶畑が点在するとともに、室町時代末期以来の歴史を誇る茶問屋が立ち並び都市景観を有する地です。宇治の茶栽培は、鎌倉時代に始まる長い歴史を持ち、16世紀後半に他地域に類をみない覆下栽培の方法が開発され、質の高いてん茶などを生産してきました。また、同じ頃から茶業を取り仕切る茶師が頭角を現し、江戸時代を通じて抹茶などの高級茶の製造と販売を独占し、宇治独特の茶文化を育みました。中宇治には、茶師屋敷をはじめとする茶問屋の立ち並ぶ活気のある町並み景観が現在も見られます。

宇治川河川敷や、中宇治から山一つ隔てた白川の地では、本質及び寒冷紗による覆下茶園が営まれており、てん茶や玉露が生産されています。これらの茶園から摘まれた茶葉は、中宇治や白川の茶問屋等で乾燥、選別、合組が行われ、製品化されます。

中宇治の中心市街地と白川等の茶畑は、国の重要文化的景観に選定されています。

中宇治

長い歴史を持つ抹茶生産の中核をなす市街地です。宇治橋通りを中心に、戦国時代からの宇治茶業を取り仕切った茶師の旧宅や茶問屋、茶農家が立ち並び、茶の製造と販売をおこなう茶業街を形成しています。市街地の裏手には、かつては扇状地の地形を利用した覆下茶園が広がっており、現在も市街地内や宇治川河川敷、段丘上などに茶園が営まれています。



⑥ 覆下・露地茶園の景観
白川の本質、上明には、本質を含む覆下茶園と露地茶園が谷を埋め尽くし、柿の木が彩りを添える、桃源郷のごとき茶園景観が広がります。



⑦ 白川金色院の坊に由来する棚田
覆下茶園には大量の稲藁が必要となるため、茶園には水田の存在が不可欠です。白川の棚田は、白川金色院の十六坊跡に営まれており、古くに引かれた水系を利用して水田化されたものと考えられます。



⑧ 茶農家の集落景観
白川の集落では、敷地内に茶工場を有する茶農家が、通りに沿って立ち並びます。古くは通り沿いに茶工場を構えましたが、昭和初期以降になると敷地奥に茶工場が引き込まれ、大型化します。



① 宇治橋三の間から望む宇治川の景観
琵琶湖に発する宇治川は、宇治で丘陵から平地に流れ出ます。この地形変化は、扇状地の地質や朝霧のかかる気象を生み、古くは平安貴族に愛され、新しくは宇治茶生産の展開の源となりました。



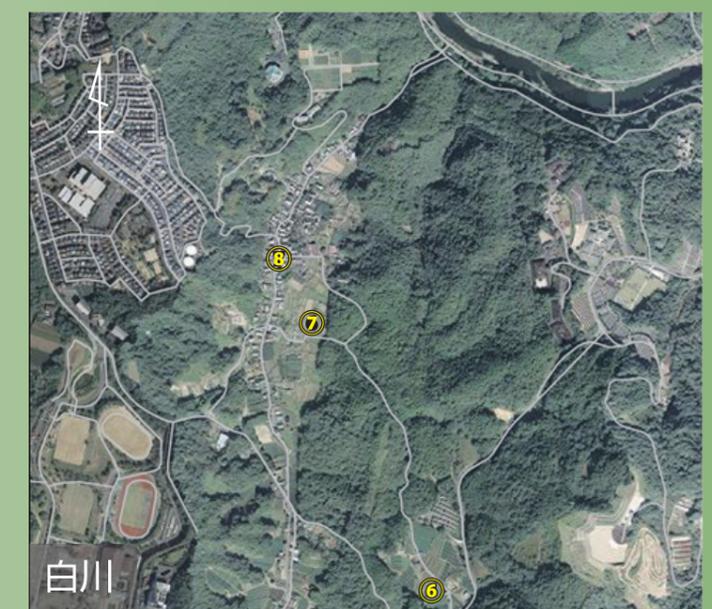
② 宇治川河川敷の覆下茶園
宇治川河川敷では豊田秀吉が宇治川の大規模な河川改修を行った際に築いた太閤堤が発見され、国史跡に指定されています。その直上には、河川敷の水はけの良い土壌を利用して、本質及び寒冷紗の覆下茶園が営まれています。



③ 宇治橋通り商店街と茶問屋・茶農家
メインストリートの宇治橋通りには、戦国時代から茶師屋敷が立ち並び、現在も複数の茶問屋と茶農家が並びます。この歴史は、町家の軒が道路内に大きく張り出す独特の空間利用に刻み込まれ、通りの景観を個性付けています。



④ 茶工場の煉瓦造乾燥炉
宇治橋通りの町家の奥には、抹茶の原料となるてん茶を製造するための煉瓦造の乾燥炉が現在も現役で稼働しています。中宇治独特の奥行き深い敷地形状を利用して、10mを超える長大な乾燥炉が設置されています。



中宇治から山一つ隔てた谷筋に展開する茶生産集落です。12世紀初頭に創建された白川金色院を中心に、16の坊が営まれた地で、これらと入れ替わるように、江戸時代に茶生産集落が発達しました。谷筋を埋めるように覆下茶園や露地茶園が広がり、柿の木や棚田とともに、宇治市域の茶園の原型ともいべき茶生産景観が残っています。

城陽市域の宇治茶の生産景観

上津屋



③ 木津川河川敷に広がる覆下茶園

木津川右岸の河川敷には、水はけの良い砂地を利用して、本糞や寒冷紗を用いた覆下茶園が広がっています。

八幡市域の宇治茶の生産景観

上津屋、野尻、岩田



① 流れ橋と木津川河川敷に広がる覆下茶園

木津川にかかる流れ橋は、かつて一つの集落だった両岸の上津屋を繋いでいます。河川敷には覆下茶園が広がります。

概要

城陽市の市域東部は山地が広がる一方で、中央から西部にかけては広く平地が形成されています。宇治市域に隣接していることから、早くから茶生産が伝播し、17世紀中期には市域に茶園があったことが確認されています。

上津屋は、城陽市域の北西端にあたる地区です。木津川のすぐそばに立地しており、河川敷には本糞や寒冷紗を用いた覆下茶園が広がっています。覆下栽培は19世紀以降に宇治から木津川流域に広まりましたが、本地区はその典型例となっています。河川敷の平坦な砂地を利用した覆下茶園で生産されるお茶は、松のような濃い緑をもつ独特のお茶となり、現在、上津屋地区はてん茶（抹茶）の主要産地の一つとして知られています。

対岸の八幡市上津屋とは、かつては一帯の集落でしたが、木津川の流路変更にともない2集落に分かれました。対岸の上津屋との間を結ぶ渡船の発着場もありました。集落内には木造のてん茶工場などの茶工場が点在し、河川と生活・生業が一体化した姿をうかがわせます。



① 上津屋の集落

木津川右岸の堤防に隣接して集落があります。昔は渡船場でもありました。水田に囲まれる中に茶園も散在しています。



② てん茶工場

集落内には数多くの共同ないし個人てん茶工場があり、現在も稼働しています。



② 上津屋の集落

茶園から木津川の堤防を挟んで、上津屋の浜内集落が立地しています。かつての揉み茶の茶工場が残り、奥には重要文化財伊佐家の屋敷森もうかがえます。



③ 野尻の覆下茶園

堤防内に立地する覆下茶園では、4月中頃から寒冷紗による覆いがかけられます。一年のうちで新茶を控えたこの時期にしか見られない茶園景観です。

概要

八幡市と城陽市の境を流れる木津川を挟んで、両岸の河川敷に覆下茶園が広がっています。

八幡市域の茶業は、上津屋、野尻、岩田の3集落で営まれています。木津川河川敷に立地する茶園はいずれも19世紀以降に宇治から広まった覆下茶園です。河川敷の平坦な砂地で栽培されるこの地のお茶は、山間部で栽培される「山茶」に対して「浜茶」と呼ばれ、より濃い緑を持つことで知られています。現在ではてん茶の主要産地の一つとなっています。

上津屋集落は、城陽市側の集落と同じ名前を持ちますが、これは木津川の流路変更により分断されたもので、元来は一つの集落でした。両集落はかつては渡し船で、現在は流れ橋によって結ばれています。重要文化財伊佐家住宅が立地する上津屋の浜内集落は、この地域の集落形態を典型的に伝えており、てん茶工場が設けられる中に、かつての揉み茶工場の建物も見ることができます。

河川敷の茶園は京都府景観資産登録がなされ、景観の保全が図られています。

京田辺市域の宇治茶の生産景観

飯岡



③ 丘陵の地形を活かした飯岡の土地利用

河川沿いの独立丘陵という独特の地形を巧みに利用して、茶園、果樹園と集落が丘陵を覆い尽くすように展開し、さらに竹林が外周を取り巻いています。

宇治田原町域の宇治茶の生産景観

湯屋谷、奥山田、郷之口



⑧ 大福谷の茶園

宇治田原茶発祥の地とされる谷筋に営まれる茶園。細い谷筋は山林によって遮光され、天然の覆下のような環境を作り出し、お茶の新芽への霜害を防ぎます。

概要

京田辺市飯岡地区は、丘陵の地形と地質を活かした最高級の玉露産地です。

木津川左岸に隣接する標高 66.8m の独立丘陵が地区の中心です。頂部には山城地域を代表する古墳群があり、歴史的な重層性をうかがうことができます。

丘陵は外周が竹林に覆われ、内部が集落と茶園及び果樹園に利用されています。かつては果樹園が優勢で、徐々に茶園の面積が広がりました。丘陵の周囲には条里制の痕跡を留める水田が広がり、河川、平地、丘陵からなる伝統的な玉露生産の土地利用を今に伝えています。

集落は丘陵内に立地しており、屋敷は農作業にあわせた造りとなっています。屋敷の外周には、かつての手揉み茶工場の建物があり、荒茶加工に加えて、収穫物の保管場所として、さらに茶摘み等の農作業の手伝い人の宿泊場所として、さまざまに利用されてきました。このような建物が数多く残されており、自製による製茶が継続的に行われてきたことがうかがえます。

外周の竹林は、玉露生産に不可欠な覆棚をつくる材の供給地となっており、生業に不可欠な場所でした。



① 手揉み茶工場跡

飯岡の集落の外周には木造平屋の手揉み茶工場として建てられた建物が数多く見られます。



② 七井戸・古墳

集落内には七井戸と呼ばれる井戸や、古墳時代前期～後期の古墳がみられ、歴史の重層性をうかがうことができます。



概要

宇治田原町は信楽街道と田原川が交わる交通の要所として古くから栄えた地で、江戸時代に入り、永谷宗円による煎茶製法の開発や販路拡大によって急速に成長し、煎茶生産の中核を成すに至りました。

奥山田、湯屋谷は、鷲峰山北麓の谷筋に展開する集落で、江戸時代までには奥山田の大福谷で茶栽培が始められ、その後湯屋谷で永谷宗円によって煎茶の宇治製法（青製煎茶製法）が開発されました。宗円は江戸への販路開拓も成し遂げたため、谷深い地ながら茶農家に加え茶問屋も軒を連ねる集落形態が生まれました。

茶園は谷沿いの水田脇に設けられた原型というべき茶園景観にはじまり、戦後には大福に大規模な山なり茶園が開かれ、寒暖の差の大きい気候を活かした香りのよい煎茶が生産されています。また、両集落には古い手揉みの茶工場や製茶機械用の木造茶工場が残され、狭い谷筋に石垣を高く積んだ特徴的な景観を見ることができます。

信楽街道と田原川が交わる交通の要所に位置する郷之口は城下町由来の都市構造を基盤とする茶問屋街で、町家形式を持つ茶問屋が立ち並びます。



④ 茶宗明神社

永谷宗円を祀る神社で、湯屋谷の最奥に位置しています。地元とともに、京都府南部を中心とする全国の茶業関係者の寄進により建設、維持されています。

郷之口

信楽街道と田原川が交わる物流の要所に位置する郷之口には、うなぎの寝床状の敷地が並ぶ城下町由来の都市構造を基盤として、茶問屋街が形成されています。



① 郷之口の町並み

出格子がなく軒下に広い空間がある町家が並び、かつての物流の様子を窺わせます。



② 郷之口の茶問屋

郷之口の東端の犬打川脇に位置する一際大きな茶問屋。



③ 柿屋

宇治田原の冬の風物詩の「柿屋」。茶園には柿の木が必ず植えられており、茶生産の原風景が見られます。

和束町域の宇治茶の生産景観

石寺・撰原・釜塚・原山・湯船



③ 釜塚の山なり茶園

集落背後の山を頂に至るまで大規模に開墾した急斜面の山なり茶園が、迫力のある景観を見せます。



⑤ 永谷宗円生家

谷奥の茶宗明神社の脇に立つ永谷宗円の生家跡。内部に当時のほいろ跡が保存されています。



⑥ 湯屋谷集落の景観

細い谷間に建物が並ぶため、石垣の上にそそり立つ様に茶農家や茶問屋の建物が並んでいます。



⑦ 木造3階建の製茶場

急斜面の際に建つ唯一の木造3階建ての製茶場で、谷の入口に構える偉容は茶生産の盛況ぶりを物語ります。



⑨ 大福集団茶園

戦後に開拓された集団茶園で、丘陵の地形を活かして開墾し、茶畝を水平に通した横畝の「山なり茶園」です。



湯屋谷

永谷宗円が「青製煎茶製法」を開発したと伝えられる地。江戸に販路を開いたため、谷深い地ながら茶問屋が並ぶ特異な集落形態が見られます。

奥山田

昔ながらの水田と茶園を併せ持つ素朴な集落景観と、急勾配の集団茶園を有する地域です。



⑩ 明治の山なり茶園

小高い丘の斜面に小さく茶園が見えていますが、形状や植生からかつては丘全体が茶園だったことが伺えます。



⑪ 奥山田の集落

集落・水田・茶園が一体となっている茶生産の原風景が見られます。



⑫ 急斜面の集団茶園

奥山田の寒暖差の大きい気候を活かし、山々を一望できる高所に開かれた集団茶園で、急斜面を茶の畝が覆います。



⑨ 湯船の集落景観

早期に茶生産が開始された湯船には、二階建ての手揉みの茶工場を有する茶農家の屋敷が群として残されています。



概要

和束町は京都府内で最も茶生産量が多い、京都府を代表する茶生産地です。至る所に山なりに開墾された露地茶園と茶業集落が織りなす独特の景観を見ることができます。

和束町域は、木津川の支流である和束川に沿って展開する地域で、両側を山に囲まれています。和束川に沿って古代から信楽と奈良を結ぶ街道が通る、交通の要衝でした。街道沿いには中世以来の石造物が見られ、また山頂付近には代表的な中世山岳寺院である鷲峰山金胎寺が位置します。

茶生産は和束町東部から始まったといわれており、早くから茶生産が始められた鷲峰山の麓集落である原山や町域東端に位置する湯船には、手揉みの旧茶工場を含む伝統的な屋敷構えを伝える集落景観が形成されています。

19世紀半ば以降に煎茶が輸出品目となると、町内の茶生産地が拡大し、集落裏側の山腹を山なりに開墾した大規模な露地茶園が形成されました。なかでも原山、釜塚、石寺及び撰原の各地区では、集落と山なり茶園の織りなす大規模かつ良好な景観が見られ、京都府の文化的景観に選定されています。

石寺・撰原



① 石寺の山なり茶園



② 撰原の山間の茶園



石寺と撰原は、和束川を挟んで立地しますが、茶畑は谷底を通る主要道からは見えません。集落に上がると、天空に駆け上るような山なり茶園など、素晴らしい茶畑景観が広がります。

釜塚では江戸時代より茶生産が行われていましたが、戦後の増産にともない、山の頂に至るまで茶園として開墾された迫力のある景観が生まれました。

山裾には茶農家等が密集する集落があり、製茶機械用の平屋の木造茶工場が多数残されています。

④ 釜塚集落の茶工場



釜塚



原山



⑤ 原山の円形茶園



⑥ 金胎寺宝篋印塔（正安2年銘）

原山は、鷲峰山にある中世山岳寺院を代表する金胎寺の麓集落で、街道から一段上がった標高の比較的高いところに位置します。修験の行場であった金胎寺の活動のなかで、原山は和束のなかでもっとも早くから茶がもたらされたと考えられています。集落を取り囲むように山なり開墾の茶畑が広がり、集落内には手揉み製茶用の古い二階建て茶工場が多く残されています。



⑦ 湯船の伝統的民家と茶工場



⑧ 湯船集落と茶園

湯船では、林業、稲作、茶業の3つの生業が展開されてきました。伝統的民家や茶工場を含む集落景観がよく残されており、宇治茶の生産集落を代表する地区となっています。外での農作業にあわせて雪隠や井戸屋形が屋敷の周囲に配置されているのも特徴です。



湯船

南山城村域の宇治茶の生産景観

田山、高尾、童仙房、今山



⑨ 田山の集団茶園

田山、高尾の茶園は、緩勾配を駆け上がるように茶畝が伸びる「縦畝」の形式に特徴があります。木々の残る山間に茶園が点在する美しい景観が見られます。

概要

南山城村は、木津川水運を背景に、幕末からの煎茶の輸出を契機として茶園を徐々に拡大してきた生産地です。生産地は田山、高尾、童仙房、今山の4地域に広がっています。

南半に所在する田山、高尾では、**縦畝の茶園景観**が際立っています。山中に山なりに開墾された緩勾配の茶園が点在し、それらを縫うように畝が縦断する様は、宇治茶生産の景観の中でも特徴的な眺めです。縦畝は乗用摘採機の導入にも適しており、生産の合理化と伝統的な景観とが両立したものでもあります。

高尾では、尾根に沿って点在する家屋が茶園に取り囲まれる、**古くからの茶生産景観**が見られます。

また、童仙房は標高 500mの山間の平坦地に明治初期に開墾された集落で、**水田と山なり茶園が対をなす素朴な景観**が残っています。

田山・高尾・童仙房には、製茶機械に対応した木造の手揉み茶工場が多く残されています。



南山城村



④ 童仙房の茶園景観

茶園と水田が谷間に沿って対をなす茶生産の原風景が見られます。

童仙房

南山城村の北端に位置する、京都府南部で最も標高の高い地区で、明治期に新しく開拓された村です。戦後にも大きく開拓され、独特の茶園経営がなされてきました。



① 童仙房の集団茶園

南山城村の中でも童仙房では縦畝ではなく横畝が優勢で、村内の茶生産の景観の多様性がうかがえます。

② 茶畑と水田

斜面の茶畑と平地の水田が対になる茶生産の原風景が見られます。

③ 童仙房の町並み

山中に突如現れる町並みは開拓村としての童仙房の歴史を物語ります。

木津川市域の宇治茶の生産景観 山城町上粕



① 大正期建築の茶問屋

大正期には茶の販路が国内向けとなり、質の高い茶を安定して販売することで、茶問屋が隆盛を極めました。広い間口に長屋門を構え、中庭に面して茶工場と主屋を並べる屋敷構えが特徴です。

概要

上粕には、木津川水運を利用した交通の結節点である地の利を活かした茶問屋街が形成されています。

綿業を商っていた家々が、幕末からの煎茶の輸出拡大にともない、順次茶問屋へと転換し発展したもので、奈良街道に沿って広い間口を有する茶問屋が立ち並ぶ通り景観を見せます。

現存する茶問屋の建物は、幕末建設のものから、販路が国内向けとなった大正、昭和初期に建設されたものまで多様に残っており、広い間口を活かして長屋門を構え、中央の庭を茶工場と主屋が囲む、明治以降に発展した茶問屋らしい合理的な配置をみせます。



⑤ 高尾の集団茶園

縦畝が丘を越えるように走ります。



名張川の左岸に位置する標高の高い丘陵上に開かれた茶生産集落です。急勾配の斜面に南山城特有の縦畝茶園が広がります。岩が多い地質の影響から、所々に茶園から岩が露出する光景も見られます。



⑥ 高尾の茶園と家屋

急勾配の斜面に、茶園が家屋を取り巻くように開かれています。



⑦ 岩山の茶園

比較的勾配が急な茶園が多い高尾の茶園の中でも異彩を放つ、丘一つを丸ごと開拓した茶園。



今山

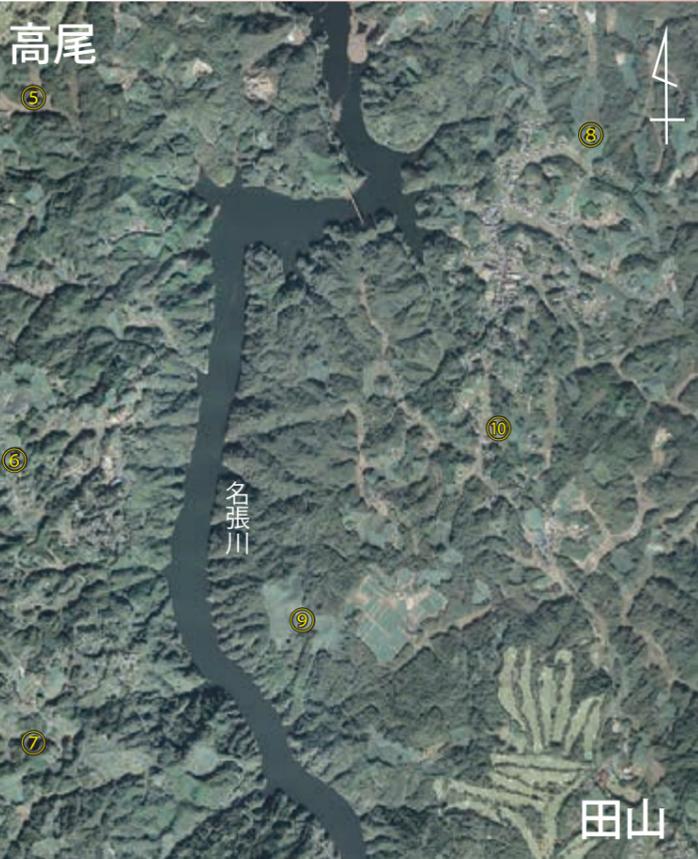
昭和44年の高山ダム建設に伴う新たな造成地で、木津川右岸の丘陵地に位置します。他と異なる平坦な茶園が広がります。



⑪ 今山の茶園

平坦で畝長約200mに及ぶ、他に類を見ない茶園景観です。

高尾



名張川の右岸に位置し、緩やかな丘陵に多くの谷筋が入る地形に茶生産景観が広がります。集落、水田と茶園がまとまりをなす伝統的景観に加え、集落から離れた山間に大規模な縦畝の茶園が広がる集団茶園も見られます。

田山



⑧ 田山の縦畝茶園

高尾と同じく縦畝が斜面いっぱいに広がる田山の茶園景観。



⑨ 田山の集団茶園

畝の向きが複雑に変化し、斜面を織りなしていく独特の風景が一望できます。



⑩ 田山の集落と茶園

斜面の茶園と平地の水田の間に家屋が立ち並ぶ、昔ながらの茶農家の生活景が良く残っています。



② 焼杉板で囲まれる路地空間

茶業の隆盛に伴い、街道沿いから裏手へと茶問屋街が広がりました。路地では焼杉の腰板を張った茶工場や土蔵に囲まれる独特の景観が見られます。



③ 近代化された茶工場

茶工場は戦後、鉄筋コンクリート造の近代化されたものになっていきますが、大正期以来の上粕の茶問屋独特の建物配置は継承されています。



④ 江戸時代後期建築の茶問屋

茶の輸出が始まった江戸時代後期に建設された茶問屋です。上粕が綿業の集落から茶問屋街へと転換していく初期のもので、街道に面して間口一杯に茶工場を配する古い配置形式を残しています。



⑤ 泉橋寺地藏菩薩

奈良街道が木津川を渡る箇所にかつて架けられていた泉橋の橋詰めに立つ、鎌倉時代造立の大きな地藏です。河川と街道が交差する上粕の地理的特性のランドマークとなっています。